宣教師としてのベギン

――教える権威――

中　川　憲　次

はじめに

マイスター・エックハルトはその説教第86番の最終段落で「海を越えて旅をし、説教し、教える（vuor über mer und predigete und lerte）」ベギン像を描いていた。もう少し引用する。

「マリアは私達の主の足元に座り、主の言葉を聞き、そして学んでいた。すなわち、彼女はまず学校に入り、生きることを学んだのである。しかし、その後、彼女が学びを完了し、キリストが昇天し、彼女が聖霊を受けたとき、彼女はようやく奉仕の業を始め、海を越えて旅をし、説教し、教え、そして使徒達に奉仕する女、使徒達の洗濯女となったのである（Maria saz bi den vuezen unsers herren und hoerte siniu wort' und lernete, wan si allererst ze schuole was gesetzet und lernete leben. Aber dar nach, do si gelernete und Kristus ze himel gevuor und si den heiligen geist enpfienc, do vienc si allererst ane ze dienenne und vuor über mer und predigete und lerte und wart ein dienaerinne und ein wescherinne der Jünger）。」（1）

この言葉に反映している当時の女性の宣教活動について、説教活動等に関する中世の女性差別の状況を瞥見してから、ビンゲンのヒルデガルトをはじめとするベギンの著作家の作品を検討して明らかにしてみたい。

1　女性の説教活動、教育活動に関する男性聖職者の否定的見解

まず、ブラバントのベギン擁護者であったヴィトリのヤコーブスにとって、女性は「囲いの内側に保護したり、留まらせることが難しい・・・したがって、悪魔のくわによってかきまわされた、うろつく、好色なもの（2）」であった。ヤコーブスにはエックハルトの場合のように、「海を越えて旅をし」たり、「説教し、教え」たりするベギンを励ますことなど、思いもよらなかったであろう。また、ドミニコ会第5代総会長であったローマのフンベルトゥスにとって、女性は男性のようには物事を予見できず、説教することを名誉と思って舞い上がり、また男性の欲情をかきたてる存在であった（3）。そしてパリ大学神学教授であったヘントのヘンリクスは、女性がキリスト教の正しい教理を身につけていても、公的に教えるべきでなく、私的に、そして男に対してではなく少女に対してのみ教えるべきである、と言う（4）。最後にトマス・アクイナスは、その『神学大全』第2－2部、第177問題第2項において、ヘンリクスと似たようなことを格調高く述べている。それは女性が語り教えることに対する中世の差別的言辞の極みと言えよう。トマスは、女性が男性に従属する性であることを前提にして、女性には公的に教えうるような知性の完成は無く、また女性が男性に教えようとして語りかけると、男性の性欲をかきたてるので、もし教える賜物を女性が与えられても、私的に教えることができるだけだ、と言うのである（5）。

2　異端審問文書に現れた「説教し行乞するベギン」（6）

次に、ベルナルドゥス・ギドーニスの『異端審問文書』によれば、誓願を立てず自由に生きていたベギンの姿が、異端審問官の目を通して活写されている。そして、ベギンの中に、貿易業を営み得るのに行乞を意識的に為していた者が存在したことも分かる。さらに、ベギンが「教えたり説教したりすることはふさわしくない」ということが、当時、疑う余地も無く当然であったことが文脈から窺える。

3　ベギンの著作から

ヒルデガルトはベギンではないが、後のベギンの著作家に与えた影響を考えると、ここではずすわけにはいかない。『スキヴィアス』第2部、第6幻視、第76章の引用（7）からは、ヒルデガルトが男性の聖職者に伍して聖職者になろうとした形跡は皆無である。何しろ彼女は「女は、土地がそれ自体によってではなく農夫によって耕されるように、自分自身によってではなく男によって子を宿す。したがって、ちょうど地が自身を耕すことが出来ないように、女は聖職者であってはならないし、私（＝神）の子（＝イエス・キリスト）の体と血を聖別する業を行ってはならない」と言うのである。このような言葉は、ヒルデガルトがシェーナウのエリザベトやガンブルーのギルベールに宛てた手紙に出てくる言葉とも響き合う。彼女はそれらの手紙の中で、自分が存在として「弱く脆い女性」「貧しくちっぽけな女性」であるということを強調しているのである。では何故ヒルデガルト

は説教したのか。それは、もう一つ引用した、SCIVIAS第1幻視、第1章の言葉から明らかである（8）。ヒルデガルトは自分のことを「地の脆い塵であり、灰の灰なる人間」として認識しつつ、「聖書の最内奥の中身を見ながら、それらを語ろうとも、説教しようともしない」高位（男性）聖職者に対して、「大声で叫び、純粋な救済の起源を語れ」という神の命令を幻の中で聴いたと言うのである。何故なら、その聖職者達が「神の義に仕えることにおいて、生ぬるく、怠惰であるから」である。ヒルデガルトは「豊かな泉に飛び込み、そして神秘の知識で氾濫せよ」という神の声を聴いている。

男性聖職者が説教活動を怠っているから、説教せよと神がヴィジョンの中で示されたと言うのである。もちろん、彼女が説教しても身の安全を保ち得たのは、その出自が貴族であったからであろう。しかし、そのことを割り引いても、当時、女性が説教するということが大事件であったことは、上の1と2で既に見てきたとおりである。だからヒルデガルトをして説教せしめたのは、彼女における「神秘の知識の氾濫」のみであったろう。語る権威を与えられない状況下で、ヒルデガルトという女性の神秘の言葉そのものが権威であったのではないだろうか。

次に引用するマグデブルクのメヒティルトはヒルデガルトの流れを引く神秘家だと言えよう。彼女もまた、女性の持つ存在論的な低さ、弱さを強調している。『神性の流れる光』の現代ドイツ語版、第1部冒頭を読みたい（9）。ここで、メヒティルトは、己が存在を「脆弱なるもの＝Unvermögen」として明確に把握している。ここに、ヒルデガルトとの共通点を見られるが、メヒティルトの出自は不明である。『神性の流れる光』には宮廷恋愛の用語が多用されているが、それが必ずしも宮廷出身であることの証拠にはならないというのが、研究者の共通理解である。

メヒティルトは修道院に入りたくても入れず、マグデブルクのベギン共同体に加わり30年以上そこに留まったベギンである。フィオーレのヨアキムを思わせる預言を含むその言辞は具体的で激しく、当時の聖職者を批判して苦境に立つが、ヘルフタの修道院に逃れて命を全うした。我々の引用箇所においてメヒティルトは「この書物を理解しようとする者は誰でも、九度読まねばならない」と言っている（10）。この言葉に彼女の明確な宣教の意図を読み取ることが出来る。

次に、ハデウィヒは、その手紙11において「私は、10歳の時以来、神に対する誠意ある愛に非常にとりつかれていた。神をそのように愛し始めた最初の2年間、私は死んでいたようなものだったに違いない。神は、多くの人々より大きな強さを私に与え、そして私の性質に彼の性質の力を与えた」と書いている。この「神に対する愛」にとりつかれた結果ハデウィヒは強烈な宣教活動に入る。彼女がベギンの共同体を指導したことが、その「若きベギンへの手紙」からも窺える。そこには、後のマイスター・エックハルトに通じる言葉が見られる。「彼らがもっていると思っている美徳は、実は彼らの欠点である。…彼らはまっすぐでなく、辛抱強くなく、キリストと共に死なない。彼らは美徳の業を成し遂げるかもしれない。しかし、彼らの意図は純粋でも真実でもない（11）」。

さて、『愛の歌』34と35からの引用には、「放浪する」とか「旅する」とか「歩く」等という言葉が印象的に使われている（12）。それらの言葉は、一見、霊的な意味で使われているように思えるし、それが普通の解釈であろうが、ベギンに特有の現実的な放浪も示唆しているとは言えないだろうか。霊的放浪は、エックハルトの言う「海を越えて旅をした」ベギンに繋がる要素を持っているのではないだろうか。そこにハデウィヒの言葉の力を見たい。

最後に、マルグリット・ポレットは、ベギンに対する迫害が激しくなった時期に火刑に処せられた神秘家である。その著『単純な魂の鏡』の冒頭の一節を引くだけで、何故彼女が殺されたかは明白であろう（13）。「この本を読もうとしているあなたよ」という冒頭の言葉からして、ポレットもメヒティルトと同じく、書かれた言葉による宣教の意思が明確である。そして、「知識の宝庫の管理人」である「謙遜」を身に付けなければ、読者はポレットの語る神秘の言葉は理解できないとした後で、舌鋒は鋭く神学者や聖職者達に向かう。「愛と信仰は、共に、あなた方をして理性を乗り越えさせてくれる。（以後）愛と信仰は理性の家の貴婦人である」と言うのである。これは強烈な聖職者批判である。男の聖職者達に理解できない、女にだけ理解出来る福音の内容を宣教するのだという、マルグリット・ポレットの明確な自覚がここから読み取れる。

さらに、彼女の宣教活動が如何なるものであったかは、同書の19章から窺える（14）。曰く、「全教会が、もし教会がその本から神の三つの徳の読まれるのを聞くなら、驚愕するであろう」。この言葉から、彼女自身がこの書物を教会全体に配布するつもりであり、そして、この書物の内容が教会全体を揺るがすものであることを自覚していたことが分かる。

結び

見てきたとおり、エックハルト当時の時代状況の中で、女性が公の場で語ったり，教えたりする権威は、普通与えられてはいなかった。コリントの信徒への手紙一14章34節の「婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語ることが許されていません。律法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい」という言葉は中世末期において厳然と力を保っていた。そのような状況下、宣教師としてのベギンの説教は、しかし確実に影響力という権威を供えていた。何故であろうか。それは、

たとえばケルンの怠惰な聖職者達に対して、「説教せよ」と迫るビンゲンのヒルデガルトの説教に明らかであったように、抑えがたく噴出した言葉そのものに自ずから備わった権威であった。男性が正しく語らないから、女性が語ったのである。

ヒルデガルトが認識したように、女性という「脆い」性をこそ、その脆さの故に神は用いられたのであった。その「脆い女性」という器から「神秘の知識」が「氾濫」したのである。男性はこの「神秘の知識」の「氾濫」としての説教に傾聴せねばならない。マグデブルクのメヒティルト、アントワープのハデウィヒ、そしてマルグリット・ポレットの言葉からは、その言葉の「氾濫」が、放浪し、旅をし、行乞するというベギンの生き様において裏打ちされていたことが窺えた。

また、ポレット流に言うなら、中世末期という厳然たる男性中心社会において、女性という、存在として「謙遜」な「性」こそが、「神秘の知識の宝庫」の鍵を開けたのである。ベギンの女性という器から、神の言葉が「氾濫」した。その氾濫した言葉自体の、語らざるをえないぎりぎりのところでの語りの力が、宣教師としてのベギンの「教える権威」の特徴であったと言えよう。

注

1 Die deutschen und lateinischen Werke/Meister Eckhart;herausgegeben im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft; Die deutschen Werke; Bd.3, Stuttgart: Kohlhammer, 1986, S.492

2 Jacobus de Vitry（1170頃—1240）
「夫は妻を支配する頭であり、（もし彼女が道に迷うならば）彼女を連れ戻し、そして（彼女がまっさかさまに転落しないように）彼女を抑制する。なぜなら、妻というものは、容易には信頼し難い、掴みにくく脆い性だからである。多情な女はヘビのように掴みにくく、ウナギのようによく動く；したがって、女はなかなか囲いの内側に保護したり、留まらせることが難しい・・・したがって、悪魔のくわによってかきまわされた、うろつく、好色なもの、それが女性である{The husband is his wife's head, to rule her, correct her (if she strays) and restrain her (so she does not fall headlong). For hers is a slippery and weak sex, not to be trusted too easily. Wanton woman is slippery like a snake and mobile as an eel;so she can hardly be guarded or kept within bounds... . . so it is with woman:roving and lecherous once she has been stirred by the devil's hoe.} (edited by Alcuin Blamires with Karen Pratt and C.W. Marx , Woman defamed and woman defended : an anthology of Medieval texts /. Oxford [England] : Clarendon Press New York : Oxford University Press, 1992, p.146)。

3 Humbertus de Romanus（1194頃—1277）De eruditione praedicatorum より
「第1に、女には、男におけるような、物事を予見する感覚が欠けている。第2に、女は自分が置かれている地位に左右される。そして、説教者は高位を得る。第3に、女が説教すれば、ちょうどGlossa（聖書注解）が言うように、欲情を刺激する。最後に第4に、最初の女性の愚行を思い出して、ベルナルドゥスは言った。「彼女はたった一度教えただけで、全世界を破滅させた（Prima est defectus sensus, de quo non praesumitur in muliere tantum sicut in viro. Secunda est conditio subjectionis quae inflicta est ei: praedicator autem tenet locum excellentem. Tertia est, quia si praedicaret, aspectu suo provocaret ad luxuriam, sicut dicit Glossa, hic Quarta in memoriam stultitae primae mulieris, de qua Bernardus: Semel docuit, et totum mundum subvertit") (Beverly Mayne (Edt) / Walker, Pamela J. (Edt) / Women Preachers and Prophets Through Two Millennia of Christianity Kienzle, / Univ of California Pr Published 1998/04、p.68)」

4 Henricus de Ghent（1213頃—1293）
Summae Quaestionum Ordinarium より
「女は神学の博士でありえようか。・・・。神の恩寵から(ex beneficio)、そして慈善心の沸騰から教えるということに関して言うとすれば、女性が誰か他の人のように教えるのは、彼女が正しい教理を身につけているなら、許される。しかし、これは公にとか、教会の前でとかではなく、私的に静かに行われるべきである。・・・男にではなく他の女性および少女に（教えよ）。女の語ることは、男達を（彼等が言うような）、そしてまた、ヒエロニモスがパウリーナに語っているような、男にとって恥ずべき不名誉な欲望へと刺激する(Whether a woman can be a doctor of theology?・・・Speaking about teaching from divine favor (ex beneficio) and the fervor of charity, it is well allowed for a woman to teach just like anyone else, if she possesses sound doctrine.But this should be done privately and in silence, not in public and before the church. ・・・to other women and girls, not to men, both because their address might incite she men to lust (as they say), and also would be shameful and dishonorable to the men, as Jerome told Paulina..)(Henry of Ghent, Summae Quaestionum Ordinarium, vol. 1. =Porete, McGinn, Bernard (Edt) /Meister Eckhart and the Beguine Mystics: Hadewijch of Brabant, Mechthild of Magdeburg, and Marguerite / Chiron Pubns Published 1997/05)」

5 Thomas Aquinas（1225頃－1274）
『神学大全』第2－2部、第177問題第2項より
「私は、語るということは二通りに用いられると答える。一つは、私的に、一人あるいは幾人かに向かっての親しい会話において。そして、この点で、言葉の恩寵は女にふさわしい。他方、教会全体の中で、公的に語りかけることは、女には許されない。それは、第一に、主として、女の性に付属している、創世記3章16節から明らかな、女が男に従属しなければならないという条件のためである。今や、教会で公的に教え、説きすすめることは、従属する者にではなく、高位聖職者にふさわしいことである。従属する男達が、もし権限を与えられるならば、これらのことを行うことがあるにも関わらずである。なぜなら、そのような従属する男達は、女の場合のような生まれつきの性によるのでなく、偶然に起こったいくらかの事柄の結果、従属するものとなったのだから。第二に、男達の心が情欲へとそそのかされないためである。それ故、『集会の書』9章11節には、『彼女の言葉は火のように焼く』と書かれている。第三に、一般に、女は公的に教えることを託されるに充分な程、知恵において完成されていないからである。・・・3について言う。神から授けられた恩寵を受け取った者は、彼等の様々の状況にしたがって、異なった方法でその恩寵を管理する。女は、もしも彼女等が知恵の、あるいは知識の恩寵に与ったならば、公的にではなく、私的に教えることによって、その恩寵を管理することができる(RESPONDED dicendum quod sermone potest aliquis uti dupliciter. Uno modo, private ad unum vel paucos, familiariter colloquendo. Et quantum ad hoc, gratia sermonis potest competere mulieribus.--Alio modo, publice alloquendo totam Ecclesiam, Et hoc mulieri non conceditur. Primo quidem, et principaliter, propter conditionem feminei sexus, qui debet esse subditus viro, ut patet Gen.3, 16. Docere autem et persuadere publice in Ecciesia non pertinet ad subditos, scd ad praelatos. Magis tamen viri subditi ex commissione pos-

sunt exequi: quia non habent huiusmodi subiectionem ex naturali sexu, sicut mulieres, sed ex aliquo accidentaliter supervenienti.- Secundo, ne animi hominurn alliciantur ad libidinem. Dicitur enim Eccli.9, 11: Colloquium illius quasi ignis exardescit. -Tertio, quia, ut communiter, mulieres non sunt in sapientia perfecta, ut eis possit convenienter publica doctrina committi.・・・AD TERTIUM dicendum quod gratiam divinitus acceptam diversimode aliqui administrant, secundum diversitatem conditionis ipsorum. Unde mulieres, si gratiam sapientiae aut scientiae habeant, possunt eam administrare secundum prlvatam doctrinam, non autem secundum publicam.)(Sancti Thomae Aquinatis /Summa theologica cura fratrum eiusdem ordinis./t.3:secunda secundae/ Matriti :La Editorial Catolica, 1951, pp.1098－1099)。」

6 Bernardus Guidonis（1260頃－1331）の『異端審問文書』から
「ベギン達は機敏で、巧妙で、狡猾である。また、彼らは、誓いをたてるように要求されないし、彼等に追随する信者達、共犯者達、そして仲間達の名前を宣誓の元に明らかにさせられるべきではない、と言う。何故なら、彼らが言うのだが、これは、そんなことをすれば、『隣人を愛すべし』という律法に反し、かえって隣人を害することになるからである。・・・また彼らは、教皇がベギンに対して、彼等が行乞に生きることを破門の苦痛で脅して禁止することは出来ない、と言う。たとえ彼等が生計のために貿易の業に携わることができ、そしてまた彼等には教えたり説教したりすることがふさわしくないので、福音に携わらないとしても、である。(Bernard Gui, Manuel de l'inquisiteur, trad. G. Mollat, Paris, Champion, 1927, t. II, 188－91. Translation (c) Jeay and Garay)

7 Hildegard von Bingen（？－1196）SCIVIS（『道を知れ』）第2部第6幻視第76章
「＜女は祭壇の務めに近づくべきではない＞　女の性に属するこれらの者も又、私の祭壇に近づくべきではない。何故なら、彼女達は子供を産み、精を出して育てるように任じられた、虚弱で脆弱な住まいであるから。女は、土地がそれ自体によってではなく農夫によって耕されるように、自分自身によってではなく男によって子を宿す。したがって、ちょうど地が自身を耕すことが出来ないように、女は聖職者であってはならないし、私の子（イエス・キリスト）の体と血を聖別する業を行ってはならない。ただ、地がその果実に水を与えるために雨を受けるように、彼女は彼女の造り主への賛美を歌うことは出来るけれども。そして、地がすべての果物を実らせるように、全ての善き業の果実は女において完成される。何故か。何故なら、彼女は高位聖職者を花婿として受けることが出来るからである。何故か。私の子と婚約させられた一人の処女が花婿として彼を受けるであろうからである。何故なら彼女は肉の夫から彼女の体を遠ざけたからである。そして彼女の花婿において、彼女は聖職者と、私の祭壇の全ての職を持つ。そして、彼（神）と共に、その全ての富を持つ。そして未亡人もまた、彼女が肉の夫を拒絶し、そして私の子の保護の翼の下に逃れるならば、私の子の花嫁と呼ばれ得る。そして、一人の花婿が彼の花嫁を過度に愛するように、私の子は、純潔のために熱心に走って来た花嫁と甘い抱擁を為す(Hildegard of Bingen ; translated by Columba Hart and Jane Bishop / Scivias / introduced by Barbara J. Newman ; preface by Caroline Walker Bynum. New York: Paulist Press, c 1990, p.278)。」

8 SCIVIAS（『道を知れ』）第1幻視、第1章
「おお、地の脆い塵であり、灰の灰なる人間よ。聖書の最内奥の中身を見ながら、それらを語ろうとも、説教しようともしないこれらの人々が教えられるまでに、大声で叫び、純粋な救済の起源を語れ。何故なら彼等は神の義に仕えることにおいて、生ぬるく、怠惰であるからだ。彼等のために神秘の囲い地の柵を開けよ。臆病な彼等はその数々の神秘を隠された実り無き畑地に隠している。豊かな泉に飛び込み、そして神秘の知識で氾濫せよ。エバの過ちを理由にして、あなたを軽蔑すべきであると思っている彼らが、あなたの溢ぎかける洪水で奮起せしめられるに至るほどに。何故なら、あなたはこの深い洞察を、人間からではなく、高きにいます、高遠で凄まじい裁判官から受けたのだから。その高きところでは、この静謐が、光り輝くものの中の壮麗な光で強く光り輝くであろう(Gebrechlicher Mensdi, Staub vom Staub der Erde, Asche von Asche, rufe und sage, wie man in die Erlösung, die alles wiederherstellt, eingeht, damit die unterrichtet werden, die, obgleich sie den innersten Gehalt der Schriften kennen, ihn dennoch nicht aussprechen oder verkünden wollen. Denn sie sind lau und schwerfällig, die Gerechtigkeit Gottes zu beobachten.Ihnen tue die verschlossenen Geheimnisse kund, die sie furchtsam in verborgenem Acker fruchtlos vergraben. Ergieβe dich wie ein überreicher Quell, und ströme geheimnisvolle Lehre aus, damit durch die Flut deiner Wasser die aufgerüttelt werden, die um der Sünde Evas willen dich [als Frau] für verächtlich halten. Denn du empfängst diese (Geistes-) Schärfe und Tiefe nicht von einem Menschen. Von dem himmlisdien, furditbaren Richter wird sie dir von oben her gegeben, wo dieses starke Licht unter den Leuchtenden mit heller Klarheit flammen wird.) (Hildegard von Bingen/Wisse die Wege : Scivias / ; nach dem Original text des illuminierten rupertsberger Kodex ins Deutsche ubertragen & bearb. von Maura Bockeler. [8. Aufl.]. Salzburg : O. Muller, [c 1987], S.95))」

9 Mechthild von Magdeburg（1207－1282）
『神性の流れる光（Das fliessende Licht der Gottheit）』第1部冒頭
「この書物を理解しようとする者は誰でも、九度読まねばならない。この書物は、神性の流れる光という。『ああ、主なる神よ、誰がこの書物を著わしたのでしょうか』。『私の中にある賜物を隠しておきたくなかったので、私は脆弱なる存在（＝女性）を用いて著わしたのだ』(Alle, die dieses Buch verstehen wollen, m・sen es neunmal lesen.'o Das Buch hsst ein fliessendes Licht der Gottheit".Eia, Herr Gott, wer hat dies Buch gemacht? Ich habe es gemacht in meinem Unvermogen, weil ich meine Gabe nicht zuriickzuhalten Vermag.) (Mechthild von Magdeburg/ Das fliessende Licht der Gottheit/; zweite, neubearbeitete Ubersetzung mit Einfuhrung und Kommentar von Margot Schmidt. Stuttgart-Bat Cannstatt : Frommann-Holzboog, 1995, S.9))

10 ibid

11 [edited by] Elizabeth Alvilda Petroff/Medieval women's visionary literature /New York : Oxford University Press, 1986, p.193

12 Hadewijch of Antwerp
『愛の歌』34
3
多くの人は愛について確信がない。
愛の仕事はあまりに激しいように彼らには思われる。
そして、最初は彼らはその中で何ものも受けない。
彼らは「あなたはそこで放浪せねばならないか」と思う。
もし彼らの目は、愛が終わりに与える報酬をはっきりと見るならば、私はあえて実に公然と言うが、
彼らは愛の国外追放において放浪するであろう。

5
愛に夢中になって放浪するのは非常に甘いことである。
愛は私たちを寂しい道に沿って旅させる。
これは外国人からよく隠され続ける。
しかし真実とともに愛を受ける彼らは
愛とともに愛において歩くであろう。
愛が淑女である王国の周りのすべては
そして、彼女と一致した者はその輝きをすべて受ける。
そして彼女の高貴な忠誠を十分に味わう。

『愛の歌』35
8
愛の本性としての甘さ、
その甘さにおいて愛は未知の憎悪を受け
その甘さと共に共に愛は頻繁に私を追求し
そして、嵐と共に私を心の深みに突き落とす。
私は暗闇の中で放浪する。明快さなしに、
慰めに逃れることなしに、そして未知の恐れなしに。
高貴な霊に愛を与える。　おお愛よ
そしてあなたが私においてはじめたすべてを完成する。
(edited by Shawn Madigan.,Mystics, visionaries, and prophets/a historical anthology of women's spiritual writings ,Fortress Press, 1998, p 178).

13 Marguerite Porete（？－1310）
『単純な魂の鏡』冒頭
この本を読もうとしているあなたよ
もしあなたが本当にこの本の内容を把握したければ、

あなたが言うことについて考えなさい。
何故なら、この本を理解するのは非常に難しい。
知識の宝庫の管理人にして、
その他の美徳の母である謙遜が、
あなたに追いつかねばならない。

神学者やその他の聖職者達よ、
あなた方には、この本を理解するための知性がない。
たとえどんなにあなた方の能力が光り輝いても、
もしあなた方が謙虚に進まないならば、だ。
そして、愛と信仰は、共に、あなた方をして理性を乗り越えさせてくれる。

（以後）愛と信仰は理性の家の貴婦人である。
(Marguerite Porete ; translated and introduced by Ellen L. Babinsky ; preface by Robert E. Lerner./The mirror of simple souls /New York : Paulist Press, 1993, p 79)

14 ibid,p182

（本稿は2001年９月28日から29日にかけて梅花大学で開催された「キリスト教史学会第52回大会」における研究発表の原稿に加筆したものである。）